

## お金の価値決定

- ・紙幣の始まり、中国皇帝の支配力の源泉

ここで、**通貨の真実**を探求してみよう。よくあるように、これについても歴史が重要な手がかりを与えてくれる。場所は中国、時は10世紀である。**宋王朝が世界で最初の紙幣を発行した**。この進んだ通貨システムにおいては、通過についての疑問の余地はなかった。**皇帝が発行し、玉璽を押した紙幣だけが通貨**なのだ。皇帝が中央銀行だった。ほかはいっさい貨幣の創造を認められていなかった。違反すれば死刑である。

**皇帝は通貨の供給を直接支配**していた。皇帝は紙幣を増刷して需要を刺激することも、紙幣の流通量を引き下げて景気を冷やすこともできた。さらに、だれが食料や原材料、武器、最新の技術の支配権を得るかを定めることもできた。意のままに紙幣を創造し、配分すればいいのだ。**彼はあらゆる場における絶対的な権力者だった。帝国の全ての資源を支配していた。**

リチャード・ヴェルナー著『円の支配者』p84

※「われわれ自身の言葉が重要なのであって、約款ではない。われわれが保証を与えるのだ。」

ヒトラーのこの言葉に接した時にすぐに思い起こしたのが、前にあるリチャード・ヴェルナー氏の中国皇帝と紙幣に関する一文でした。**ヒトラーは総統（フューラー）ですが、本当の皇帝となっていたのです。**

- ・労働力（GDP）がお金の価値を決める。

「**太政官札**」は**不換紙幣**です。リンカーンが発行したグリーンバックと同じで金や銀との交換を不要とした紙幣です。ということは金本位制や銀本位制といった金や銀が紙幣の価値を担保するのではなく、**「太政官札」の価値の根拠**は基本的にはグリーンバックと同様に**「政府に対する信用」**です。**政府通貨の根拠は「国富」**なのです。

当時の明治新政府は当然ながら非常に不安定なものでした。それもあり「太政官札」に対する評価はネガティブなものが多いです。「太政官札」記事には「国民は紙幣に不慣れであったこと、また政府の信用が強固では無かった為、流通は困難をきわめ、太政官札100両を以て金貨40両に交換するほどであった。」と記されるような具合にです。

しかし太政官札が、極めて不安定な明治新政府を発動させ、徐々に安定的に運営させるための非常に大きな力になっていたことも紛れもない事実です。

太政官札の解析をされた方がいます。政府貨幣発行特権の発動による財政政策で日本再建を訴えられていた故丹羽春喜教授です。教授は『月刊日本』[平成15年7月号](#)、[丹羽論文](#)の中で「『太政官札』発券の断行が明治維新成功への決定打だった」とし、「『太政官札』発行による造幣益が、もしも無かったとしたならば、維新政府は存続しえずに崩壊していたにちがいない。」と断言され、その根拠詳細を展開されています。

特筆すべきは、三岡八郎（由利公正）は「国富」を国民の労働力の結集と見ていたことです。現在のにはGDPです。そして経済の要は「蓄財にあるのではなく循環にある」としていたのです。丹羽教授も同様の視点で日本再建を訴えておられたのです。

[日本 明治編 第26話](#)より

※「**インフレだって？**（中略）...**重要なのは、民衆の信頼を維持することなのだ。それ以外はナンセンスだ**」

「われわれは、失業者を街からとり除かなくてはならない。早ければ早いほど効果的なのだ。」

「**金はある。金はいつでもあるのだ。ドイツ国民が労働している限り、心配ない。**」

ヒトラーのこれらの言葉は彼の考えが三岡八郎（由利公正）と同様であったことを示します。**国民の労働力こそが富であり、お金の価値を決するというもの**です。ヒトラーが大天才であったことがここからも分かります。